

『祈りへのアプローチ』 ルカ11:1-2

11:1 また、イエスはある所で祈っておられたが、それが終わったとき、弟子のひとりが言った、「主よ、ヨハネがその弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈ることを教えてください」。

11:2 そこで彼らに言われた、「祈るときには、こう言いなさい、『父よ、御名があがめられますように』。

●序論

「祈る」ことそのものは、いわゆるとても“人間らしい行為”といえるでしょう。

では、人間ならばだれでも「祈る」ことをしているか…と言われると、それはわかりません。

「祈る」というと、特別に問題がある時、願いがある時、そういう時には祈る…という方々が多いかも知れません。またクリスチャンの方々の中でも、食前の祈りだけは欠かさない…、いや普段はその時だけかな、祈るのは…という方もいらっしゃるかもしれません。

今日、私たちがイエス様の言葉から耳にするのは、まさにイエスさまの祈りである。そのことに心をとめて、わたしたちも真摯に祈る者としての召しを確認しましょう。

●本論

I. 祈りたい！という願いをもつ

11:1 また、イエスはある所で祈っておられたが、それが終わったとき、弟子のひとりが言った、「主よ、ヨハネがその弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈ることを教えてください」。

弟子たちは、イエスさまに「祈る人」を見ていました。

イエスさまの魅力、またイエスさまの力、イエスさまの自信、イエスさまの言葉、そのすべてを神さま由来のものであると感じていた弟子たちが注目していたのがイエスさまの祈りでした。その祈りにこそ、神さまからの祝福と力を受け取る鍵があると思ったことでしょう。

ちなみに、先に活躍していたバプテスマのヨハネも祈る人でした。そしてその弟子たちに祈りを教えていたということを知っていたイエスの弟子たちは、イエス様にも同じように求めたのです。

「祈ることを教えてください」。そういう願いを持って聞いていただきたいのです。

ここで祈りを求める弟子たちは、おそらく祈らなかった人たち、祈れなかった人たちではありませんでした。むしろ祈る人であったことでしょう。

そんな彼らも、イエス様の宣教、イエスさまの御業、イエス様のお姿に祈りそのものの違いを感じていたのです。

-皆さんもまた、折々に祈る人だと思います。毎日祈る人でもあるでしょう。一方で、この弟子たちと同じように祈る人として成長したい、向上したいという願いはお持ちでし

ようか？

イエス様は、弟子たちのそういう飢え渴きに答えて、いわゆる「主の祈り」をお教えになりました。

弟子たちも、その飢え乾きを通して、イエス様の教えられる祈りを聞き取り、受け取り、そして自分の祈りとしていったのです。

今日、改めてイエス様に「祈ることを教えていただきたい」というへりくだった心をもって、主の言葉に耳を傾けましょう。

II. お父さん！と心から呼ぶ

11:2 そこで彼らに言われた、「祈るときには、こう言いなさい、『父よ、御名があがめられますように。』

神に向かって「父よ」と祈り始める。この祈りはクリスチャンの祈りの最大の特徴です。

「神さま！」と呼び求める祈りもあります。イエス様もそれを当然ご存知です。でも弟子たちに求められ、教えられた祈りは、まず「父よ」と呼びかける言葉に始まる祈りであったのです。

私たちの周囲にあふれる「祈り」において、「だれに祈るのか」ということはしばしば大切にされます。

普段は、縁もゆかりもない神さまなただけけれども、学業の神様だから、安産の神様だから…と、必要に応じて神さまを選ぶ…ということがあります。

ただ、一般には、その神さまと私との間の関係など問題にしないのが普通です。

今日イエス様が祈りの最初に教えられる。「父よ！」「おとうさん！」との呼びかけから始まる祈りに心を開いてください。

おそらく世間一般では、あまり馴染みのない感覚かもしれません。

神さまを「お父さん」と呼び、祈るということですから。

でもクリスチャンは、天地を造られた神さまを「おとうさん」と呼ぶことのできる特権、身分を与えられているのです。

ヨハネ1:12 しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力（資格）を与えたのである。

イエス様の教える祈りは、まず私にとって神さまはどのようなお方であるかを、心から告白する呼びかけをもって始まっているということです。

-神さまを「お父さん」と呼んでもよい。いや事実、そのように呼び求めることのできる関係を与えられている。この父と子の関係の中で祈ることこそが、クリスチャンの祈りの特徴なのです。

-逆に言うと、私たちはこの祈りの最初に、「わたしの子よ」と呼んでくださる神さまの存在を心からアーメンと意識し受け取っていることが大切なのです。

父と子という関係の中から始まる祈りをイエス様は教えて下さいました。

それは、またイエス・キリストの十字架の贖いによって完全に保証される関係でもありました。罪や弱さを持ちながらも、またつまずいたり背を向けたりすることが

ありながらも、それでもなお、立ち返って「お父さん」と呼び求める時、わたしたちの祈りは、その呼びかけによって始めることができますのです。

ガラテヤ3:26 あなたがたはみな、キリスト・イエスにある信仰によって、神の子なのである。

1ヨハネ3:1(新共同訳) 御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです。

「お父さん」呼びかけ祈ることのできる恵みを心から受け取りましょう。

Ⅲ. 神さまを神さまとする

『父よ、御名があがめられますように。』

「神さまが、まさに神として崇められ、礼拝されますように」、という“神さまのための祈り”をイエス様は教えられました。

この祈りは、わたしたちの周囲にある「神さまを神さまとしていない現実」を浮き彫りにします。日常の中、“神さまが忘れられ、軽んぜられる現実”があるということです。私たちが染まりやすいご都合主義の神さま信仰をイエスさまはご存知なのです。

ガラテヤ6:7 まちがってはいけない、神は侮られるようなかたではない。

「御名が崇められますように」と心から祈るとき、神さまに向かう自分の心に「神様に対するふさわしい礼拝の心」を意識するようになるでしょう。

それは、造り主なる神様の前にへりくだる心です。また仕える心をあらたにします。神は神であり、私は人であることの正しい認識です。

しばしば、祈る人の不満は、自分が祈ったのに祈ったとおりにならなかった、叶わなかったということにあります。

-叶えてくれれば神さまとし、そうでなければ離れ去る。または思ったとおりになっても、時間が経てば忘れ去られる…というものであったりします。

それは、本来の神さまとの関係ではありません。

-神さまを「打ち出の小槌」、または「ランプの精」のようにとらえ…？

-もしかしたら神さまに祈る…という時、そんな自分のしもべのような存在として扱っていることはないでしょうか？ いつの間にか私が主であり、神さまが仕えるものと思っている…かも…ということです。

そんなわたしたちに、イエスさまの教えられる祈りが修正を与えてくれます。

まず「神さまの御名が崇められますように」「神さまが神さまとしてリスペクト(尊敬)されますように」ということです。

この祈りの心は、わたしたちクリスチャンの生涯のすべてを覆います。

○結論として)

「祈るときには、こう言いなさい、『父よ、御名があがめられますように。』」

この世のどんな状況を見、また体験している中であっても、神さまを「お父さん」と呼び、また神さまを神さまとして礼拝する祈りをわたしたちはゆだねられています。

人の罪の現実、祈ったとおりにならない、願ったとおりにならないと、憤り、また自分の力でそうなるように、得られるようにと、争う事に現れます。

この短い祈りの言葉は、そんなわたしたちに、生ける神さまにも思いとご計画があることを諭し教えてくれます。

マザー・テレサのことば

「できない(得られない)現実があるということは、御心ではないということ。それだけのことなのです」と。

心から、神さまに御思いがあるのだということを知り、神さまに道を明け渡しているのです。

「父よ、御名が崇められますように」と祈り、神さまのみ思いに耳を傾けましょう。

1ペテロ5:7(新改訳)あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

神さまを「お父さん」と親しく呼び求める中で、この御言葉が自分の信仰生活になじんできます。

神様の思いは現実になります。わたしたちの祈りを聞いてくださり、最善の答えを返してください。その御心はその御手によってなされていきます。

今日、この祈りによって、神の御名があがめられる、そういう人生がある。そういう人生をイエスさまは歩まれた。そしてそういう祈りをわたしたちに教えてくださっているということを、覚えていただければ感謝です。